

三月卅日。雨。茅原、井奈、谷岡氏へハガキ。瀧井氏、本間氏より手紙。單行本「情か無情」の校正初まる。西村氏を訪ふ。

三月卅一日。雨。本間氏へ返事。茅原氏へハガキ。日本評論社よりハガキ。議員候補者淺賀並に前田兩氏の推薦依頼状が来た。末日會へ行く。

四月一日。雨。東洋大學で演説を依頼されたが、時間を通知して來なかつたので行かなかつた。井奈、中戸川二氏よりハガキ。「情か無情」の初校終はる。玄文社より手紙、同じく返事(どんな芝居を見たいかと云ふ質問だから、僕が最初に發行させる脚本集中のうちの物をやらせて、それを見たいと云ふ心が盛んなことを以て答へた)。

四月二日。雨。日本評論社を訪ふ。

四月三日。雨。中尾氏より手紙。小出氏の選舉依頼状。岡氏よりハガキ。川路氏よりハガキ、同じく返事。「公爵の氣まぐれ」と云ふ單行本をまとめた(同名の)「大將の疑惑」、「津田三藏」、「お増の信心」、「狐の皮」並に「難船」。

四月四日。雨。短歌會あり。吉野氏よりハガキ。

四月五日。雨。井上、巖二氏よりハガキ。「おせいの巡禮」(七十七枚)を書き上げ。「今一度江口氏へ」(八片)をよみうりへ。

四月六日。雨。新潮記者來訪。隆文館店員來訪。「新自然主義」、「半獸主義」に「悲痛の哲理」を冠して六百ページばかりの一書にする約束ができた。新自然主義四百ページだけの紙型はこちらで提供して、印税八分。少し割りが悪い。原子來訪、共に江部氏を訪ふ。學藝書院の主人來訪。「公爵の氣まぐれ」初版印税のうちから百圓也。

四月七日。曇。鹿沼の鈴木よりハガキ(分挽の通知)。昨夜より今朝の九時まで論文や脚本の訂正。時事より稿料。

四月八日より十日夜まで森ヶ崎滞在。

四月十日。十日會を森ヶ崎に催した。

四月十一日。月評會の觀櫻會あり。

四月十日より十二日まで氷室氏とまり。

留守より今日までに露西亞會より手紙。友達會より。岡田利勝氏死去の通知。山峰氏よりハガキ。中外日報社より手紙、月二十圓で長短に拘らず四回分の原稿を書くことを依頼。岡田、日本評論社、芥川氏へハガキ。研究座より手紙。

四月十二日。晴。沼波氏よりハガキ。岡田氏へハガキ。氷室氏宇都宮へ歸る。佐藤(四)氏來訪。太陽より使ひ、「おせいの巡禮」(七十九枚)の稿料貳百拾三圓三十殘也。

四月十三日。晴。釜山日報社より手紙。前田候補より端書。「情か無情」再校正み。西村氏を訪ふ。
四月十四日、十五日、十六日。春山、菊子、森本、大澤、高階、本間、氷室夫人、氷室、橋爪、伊東夫人よりハガキ。

國粹出版社より手紙。小野崎來訪。

四月十七日。晴。日本評論社より「情か無情」の初版印稅殘金百三十八圓也。吉野氏を訪ふ。

四月十八日。晴。畑を返して廿日大根と時なし小燕とをまいた。池田氏來訪。

四月十九日。――

以後、かぜの氣味で面白くなし。

四月廿三日――常盤座へ招待された。

四月廿四日――劇作家協會設立の相談に列す。

四月廿五日――研究座を見る。

泡鳴全集 第十二卷 終

大正十年十二月十五日印刷
大正十年十二月十八日發行

泡鳴全集 第十二卷
(非賣品)
個製本

著者 岩野美衛

國民圖書株式會社代表者

發行者 中塚榮次郎

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

印刷者 長谷川美磨

東京市麴町區山元町二丁目十四番地

印刷所 國民圖書株式會社



發行所

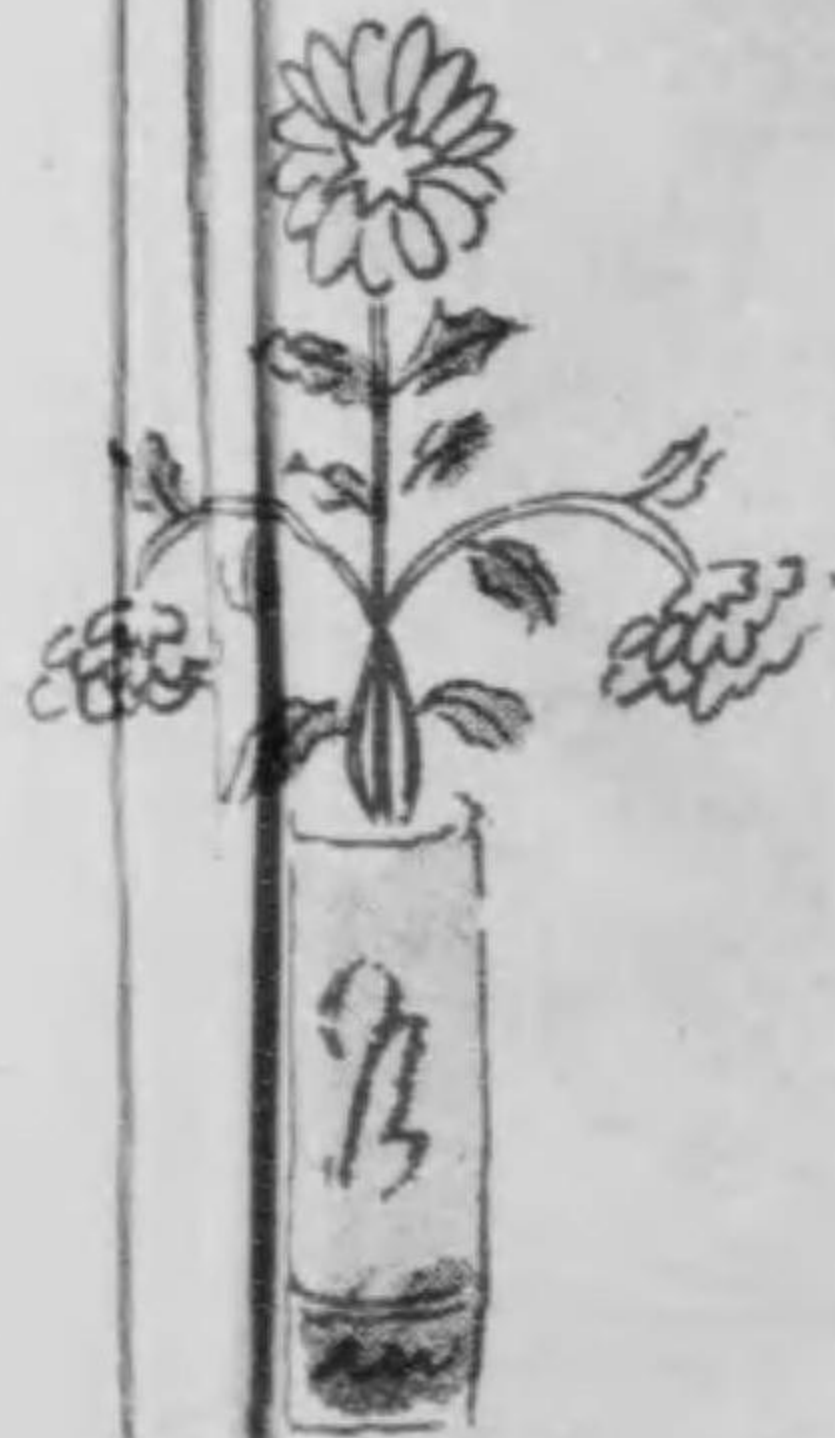
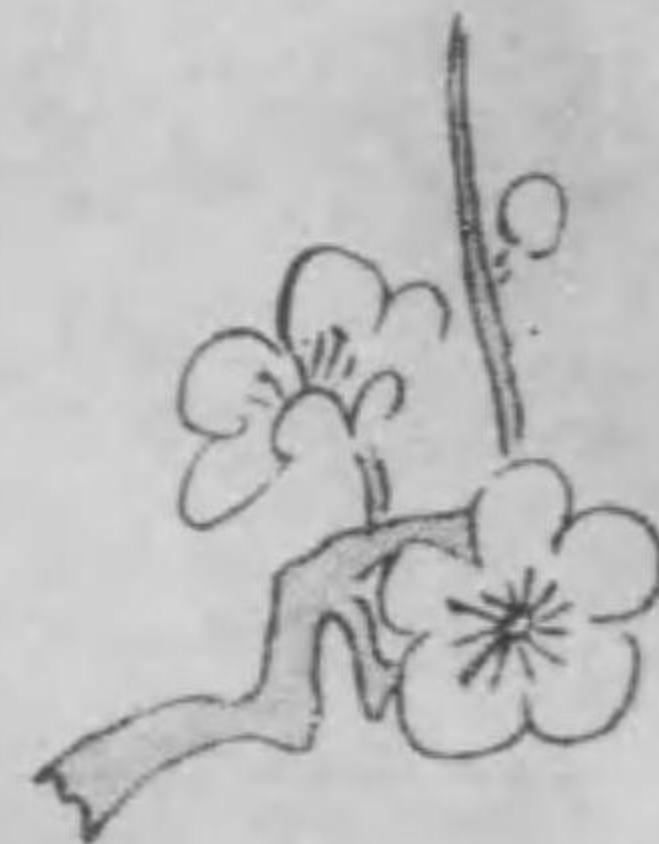
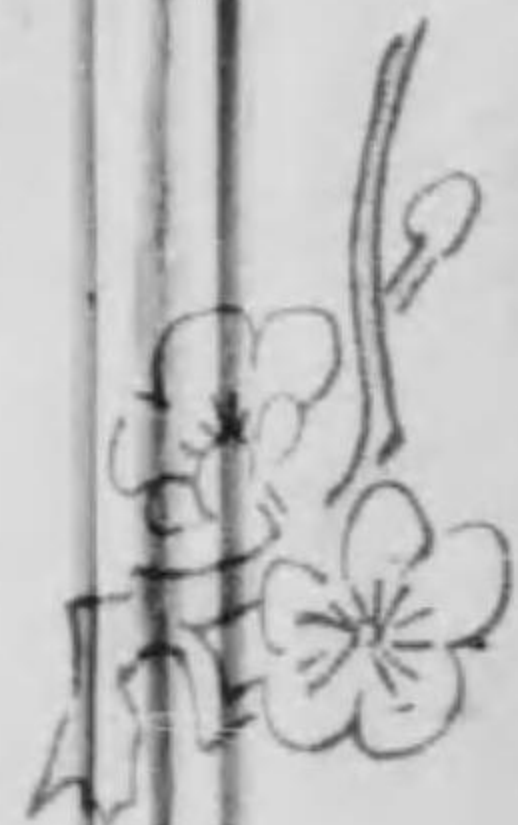
高京市麴町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

電話 銀座七八三番
振替東京五二二九八番



Handwritten text in a decorative box, possibly a title or date.

Small handwritten text below the box.



終

